

最期の表情 忘れない

遺体を納棺するためのひつぎをひたすら組み立てる日々だった。

札幌市内で葬儀会社を経営する中島浩盟さん(49)は、帯広や釧路などの同業者のメンバー10人とともに宮城県の仙台や石巻市内で6日間、震災被災地の葬儀会社を手伝った。

亡くなった人が日に日に増え、葬儀会社の人手が足りず、



全日本葬祭業協同組合連合会が

てた。中島さんは「本当にこん

ら応援を頼まれたためだ。多い日は約30人のグループで、ひつぎ約700本を組み立

なに必要なのか」と思ったが、次々と遺体安置所に運ばれ、すぐになくなった。作っても作っても、足りない被災地で遺体を納棺した時の様子などを語る中島さん

震災 人 ちから

かった。

遺体を納棺した日もあった。慣れているはずだったが、多くは苦痛に満ちた顔をしていて、正視できなかった。遺体を確認しに来たらしい初老の女性が「おとうさん」と泣き叫ぶ声を聞いた。

札幌に戻ってからは、取引先などに被災地での体験を話し、義援金を募る。「自分たちができることは、すべてやらないといけない」と感じたからだ。

(徳永仁)